

上野英信氏の『追われゆく坑夫たち』を何回、読んだであろうか。石炭は「黒いダイヤモンド」と言われ、戦後の経済復興を可能にした基幹エネルギーであった。社会科の教科書には、煙突からもくもくと煙を吐く工業地帯の写真が載っていた。炭鉱は日本経済を蘇らせた立役者であった。ところが、エネルギーは石炭から石油に代わり、炭鉱は没落の一途を辿っていった。上野氏は、職場を失い、困窮する坑夫たちの実像を『追われゆく坑夫たち』に記録し、更に、南米に渡った坑夫たちを追いかけ『出ニッポン記』を著した。

炭鉱では、事故がしばしば起きて、多くの死者が出た。炭鉱の閉鎖に反対する歴史に残る労働運動を展開したが、社会の変革には抗し切れなかった。自ら坑夫として働いた上野氏は、生活の場を失った坑夫たちへの限りない愛をもって、民衆の実存史を綴っている。

沖縄県石垣島生まれの三木健氏が、8月に『眉の清らさぞ神の島 上野英信の沖縄』を上梓している。上野氏は『眉屋私記』という人間絵巻を書いている。私は読んでいないが、三木氏は、上野氏らしい思いを込めた緻密な取材によって、『眉屋私記』は書かれたと、上梓までの顛末をドラマチックに描き出している。

上野氏は、「貧しい家の男は県外出稼ぎか海外雄飛、女は辻遊郭」という沖縄庶民の生き様を『眉屋私記』で結実させている。「眉屋」とは、同書の主人公・山入端萬栄と妹ツルが属した名護市屋部集落の山入端一族の屋号である。萬栄は、1907年に、炭鉱移民としてメキシコに渡った。メキシコ革命が起こり、憲政政府が発足するが、反革命派の将軍が政権を握る。その政権軍に入隊し、従軍する。だが革命派師団に撃破され、萬栄は捕らえられ、処刑される寸前、日本人ゆえに助命される。砂糖景気に沸くキューバに渡り、ドイツ公使の運転手になり、ドイツ人女性と恋に落ち、結婚し、娘を得る。沖縄から海外に雄飛したが、故郷に錦を飾ることなく、沖縄を恋しがりながら、波乱万丈の70年の生涯を終える。妹のツルと上野氏は出会い、彼女の人生も綴る。ツルは、那覇市の辻遊郭に身売りされた二人の姉と暮らし、三線を習い、師匠になる。沖縄、奄美大島、東京、千葉と流れていく。西崎流家元の西崎緑が歌舞伎座で琉舞を踊った時には、地方をつとめるほどの名手になっていた。ツルは沖縄に帰り、三線を教えたり、漢字の筆写にいそしんでいる。彼女もまた、沖縄の女性らしく、荒波の海を航海したのである。

上野氏は、萬栄とツルの生涯を丹念に追い、眉屋の個人史を描いた。上野氏にとって、坑夫たちと沖縄の庶民は、坑道の「闇」において繋がっていた。しかし、闇が闇で終わる悲劇ではなく、闇の中に光を見、その光に転じる「民衆史」を描いたのである。三木氏は眉屋を「清らさぞ神の島」と捉えている。

私は、高校時代の日本史の教師が、「歴史は強者が紡ぐ歴史であるが、民衆の側から見た歴史を書いてみたい」と言われた言葉が、心に深く残っている。韓国の軍事政権時代、「民衆神学」が起こった。この神学は、生存権さえ奪われ、弾圧下に置かれた民衆が歴史の主体であるという視点で営まれ、敢然と闘った神学である。南米で起こった「解放の神学」も、地面に叩きつけられた民衆が生きる権利と福祉を求めて立ち上がった神学と言えよう。まさに、歴史を民衆の側から捉えていく。上野氏は、筑豊と沖縄の名もない庶民が生きた過酷な「民衆史」を描き、そこから「光」を望んでいたに違いない。上野氏とツルを取り巻く人間関係の真摯さと濃密さは格別である。同じ視点を持ち、同じ希望に生きる人々が互いに尊敬し合い、深く結び合った連帯感美しいという言葉に尽きる。